

英領ホンジュラスにおけるアメリカ南部連合国再建の試み —現代ベリーズに見る南部連合国からの亡命者の軌跡—

Confederate idealists in British Honduras
—Southerners in exile: An impact on the construction of modern Belize—

伊藤 みちる
大妻女子大学国際センター

Michiru Ito
International Center, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：英領ホンジュラス，ベリーズ，アメリカ南部連合国
Key words：British Honduras, Belize, The Confederate States of America

抄録

1861年から1870年にかけてアメリカ南部連合国から数千人ともいわれる亡命者が英領ホンジュラスへ渡った。彼らの多くは南北戦争前のアメリカ南部社会を新天地で再現することを夢見ていた。英領ホンジュラスは農業生産向上，白人人口増加，ユカタン・カスタ戦争の軍事支援を期待して亡命者を歓迎した。しかし当時の英領ホンジュラスの政情やアメリカ南部とは異なる熱帯気候の中で生活は厳しく，アメリカ南部連合国独特の政治的・経済的・社会的再現は不可能であると悟った者の多くは，亡命後数年のうちにアメリカ合衆国へ撤退してしまった。2023年2月にベリーズで行ったフィールドワークでは，トレド県に残る墓地やベリーズ各地の地名として見られる彼らの家名や出身地名以外にアメリカ南部連合国からの亡命者の軌跡を見つけることはなかった。とはいえ亡命者によるプランテーション設立の試みは後に大規模農業を発展させるための基礎となり，英領ホンジュラスがベリーズと名が変わってからも農業が牽引する長期的な経済発展を可能にしている。

1. はじめに

かつて英領ホンジュラスと呼ばれていたベリーズは1981年に独立した，国土約2万3千km²，人口約40万人の小さな英連邦王国である。ベリーズは中央アメリカ東部のユカタン半島南部に位置し，北はメキシコ，西はグアテマラ，南東はホンジュラス，東はカリブ海を臨み，その海岸線を守る要塞のように世界自然遺産「ベリーズ珊瑚礁保護区」に代表される環礁が連なっている。

ベリーズがまだ英領ホンジュラスだった1861年頃から1870年頃にかけて，アメリカ南部連合国から数千人が亡命してきた。当時英領ホンジュラスでは先住民と白人支配層の間でユカタン・カスタ戦争が行われていた。しかし英領ホンジュラス植民地政府はアメリカ南部連合国の軍幹部や政治家，大規模プランテーション経営者などを対象に

免税措置を含むさまざまな特典を打ち出し移住を促進した。このアメリカ南部連合国からの亡命者は英領ホンジュラス社会に大きな影響を与えたにも関わらず，その実態の認知は限られている。

本稿の目的は，第一に2023年2月に大妻女子大学戦略的個人研究費の助成を受けて実施した現地調査を踏まえて，このアメリカ南部連合国から英領ホンジュラスへの亡命そして定住の試みを取り纏めることである。その上で21世紀現在のベリーズ社会に見ることが出来る彼らの軌跡を記録することである。

2. アメリカ南部連合国から英領ホンジュラスへ

2.1. 背景

現在のベリーズが存在する地域には紀元前からマヤ文明が発達していた。この地域の海岸線に沿

って 1502 年にコロンブスが航海したことは記録されているが上陸はしていない[1]. その後 1531 年にペリーズはスペイン帝国のグアテマラ総督領に組み入れられてスペイン領となったが、金・銀を産出しないため 100 年以上が経っても放置され続けることになった。1638 年にはイギリス系の海賊が無断で入植を始め、この地域を拠点にカリブ海を横断するスペインの金銀運搬船を襲い始めた。

次にこの海賊は 1660 年頃からスペインの許可を得ることなく、染料として市場価値が高いログウッドを徹底的に伐採し始めた。その量は 1671 年の一年間だけで 2,000 トンに達し、そのすべてがイギリスに輸出された[2]. 木材伐採・運搬のためにさらなる労働力が必要であったため、1724 年には英領ジャマイカと英領バミューダから黒人奴隷が輸入された。限りある森林資源であるログウッドは 1750 年頃から枯渇の兆しを見せ、伐採の対象が変化していった。粉砕しても価値が変わらないログウッドから、無傷で大きいほど建築材として高い価値が付く、家具や造船に最適なマホガニーが新たな伐採の対象となった。成木ともなると高さ 45m, 直径 2m に達するマホガニー伐採のために一層の労働力が必要となり、さらなる黒人奴隷が輸入された。

1798 年にこの地域の領有権はスペインからイギリスに移ったが、マホガニー輸出に関しては特別な影響はなかった。1803 年の英領ホンジュラス植民地政府統計によると、総人口 4,000 人のうち白人が 300 人で黒人奴隷は 3,000 人であった[3].

1861 年から 1870 年にかけてはアメリカ南部連合国外から英領ホンジュラスに大量の亡命者が流入した。その一部はアメリカ南部連合国外からの出国記録や英領ホンジュラスへの入国記録のどちらか、もしくは両方ともに存在しない密出入国を伴う亡命であった。したがってこの時期にアメリカ南部から英領ホンジュラスに何人の亡命者が渡航したのかを示す正確な数値は不明である。

亡命者の多くは新天地でプランテーションを経営しながら南北戦争前のアメリカ南部連合国外と同じような生活を送ることを希望していた者たちであった。南北戦争を機にアメリカ南部連合国外からはブラジルやメキシコ、ベネズエラへも亡命したが、特に英領ホンジュラスが人気で、将校レベルの軍人や政府高官、大規模プランテーション経営者といった、いわゆる名士たちが亡命してきた[4].

2.2. アメリカ南部連合国外側の思惑

英領ホンジュラスが亡命先として人気だった理由は主に 4 点である。第一に、英領ホンジュラスが英語圏であることだ。親英派のアメリカ南部連合国外からの亡命者にとってイギリス英語が使用されている英領ホンジュラスでは新たな生活を構築するにあたり言語面での壁がなかった。第二に、亡命者は英領としての経験を共有する英領ホンジュラスに対して現実とはかけ離れた幻想を抱いていた。英領ホンジュラスの歴史的・政治的・物質的社会はアメリカ南部と類似しているから生活場所を移行しても容易に順応できるだろうと期待したのである。特に南北戦争前後は、英領ホンジュラスの黒人は既に奴隷解放されて自由の身となっており、アメリカ南部のプランテーション社会とは完全に異なる社会が構築されていた。第三に、アメリカ南部連合国外と英領ホンジュラスの地理的な近接性である。移動が比較的簡単であり、定住に失敗した際にもすぐに祖国に帰ることができる点は亡命することに対する精神的ハードルを下げた。第四に、アメリカ南部連合国外の名士たちは、亡命先の英領ホンジュラスでもイギリス植民地特有の社会階層の支配的な地位に自動的に属することができると思われて疑わなかった[5]. 実際にはイギリス植民者が社会階層の高位を占め、アメリカ南部連合国外からの亡命者の多くは農業労働者としてしか扱われず、社会階層を上る事例は多くなかった。このような理由でアメリカ南部連合国外からの亡命者たちは、南北戦争を機に理想郷を求めて英領ホンジュラスへの移住を決めたのであった。

2.3. 英領ホンジュラス側の思惑

英領ホンジュラスがアメリカ南部連合国外からの亡命者を積極的に受け入れた理由は 3 点に集約できる。まず英領ホンジュラス植民地政府は大規模なプランテーション経営のノウハウを持つアメリカ南部連合国外からの亡命者に対し英領ホンジュラスの農業生産を向上させて欲しいという期待を持っていた。ログウッドやマホガニーといった貴重な天然木材資源の枯渇傾向が顕著に見え始めた 1860 年前後に、英領ホンジュラスは代替輸出品として綿花や砂糖、バナナや柑橘の栽培を始めたため、特に綿花やサトウキビのプランテーションに馴染みのあるアメリカ南部連合国外からの亡命者は理想的な移住者であった。そして英領ホンジュラ

ス政府は植民地計画の一環として白人人口を増やす必要があった。したがって黒人との混血を好まないアメリカ南部連合国からの白人入植者は大歓迎された[6]。また英領ホンジュラス植民地政府はユカタン半島の統治を巡る先住民と白人支配層との間で勃発したユカタン・カスタ戦争における緊張の高まりに対処するためにアメリカ南部連合軍の退役軍人たちが何らかの軍事的支援をしてくれるかもしれないという淡い期待を持っていた。

2.4. 1861年～1867年

1861年から1867年にかけて英領ホンジュラスはアメリカ南部連合国からの亡命者を大歓迎した。1861年にはジョージア、バージニア、アラバマ、メリーランド、テキサス、テネシー、ルイジアナ、ミシシッピの各州から亡命者が殺到し始めた。同年の人口統計によると、英領ホンジュラスの総人口は25,635人であり、そのうち7,000人超がアメリカ南部連合国からの亡命者であった[7]。これはたった一年で英領ホンジュラスの総人口を1.5倍も押し上げた数値であり、アメリカ南部連合国からの亡命者の存在が英領ホンジュラス社会に大きな変容をもたらしたことが想像できる。

アメリカ南部連合国政府は国民に対し英領ホンジュラスへの亡命を思い留まらせるために様々な策を講じたことが資料に残っている[8]。しかしそれらはあまり功を奏さなかった。アメリカ南部では南北戦争後に見込まれた急激な社会変化に対する強い拒絶感と絶望感が漂っていた。英領ホンジュラス植民地政府は亡命者の移住誘致策として、英領ホンジュラスにアメリカ南部プランテーションに似たユートピア的なイメージを与える広告を行った。特にルイジアナやミシシッピではこの手の広告が成功したようで、記録されているルイジアナとミシシッピからの亡命者にはプランテーション経営者が圧倒的に多い[9]。

特に南北戦争でアメリカ南部連合国の敗戦色が濃くなった1865年以降、アメリカ南部連合国から亡命者が大挙してやってきた。彼らの希望は英領ホンジュラスで広大な土地を買い黒人奴隷を労働力として使いプランテーション経営をしながら南北戦争前のアメリカ南部連合国での生活を再現することだった。

英領ホンジュラスにはログウッドやマホガニー伐採の労働力として黒人奴隷はすでに導入されて

いた。しかし英領ホンジュラスを含むすべての英領植民地では、とうに1833年に奴隷制が廃止され1838年に黒人奴隷は完全に奴隷解放されていた。したがって法律上はすべての黒人は自由の身分となっていた。南北戦争前の祖国アメリカ南部連合国において黒人は動物と同等のただの労働力であった。亡命者たちは黒人奴隷制を守るために南北戦争を戦ったのにも関わらず、敗北後に亡命した英領ホンジュラスでは黒人は自分たちと同等の存在であった。そのためアメリカ南部連合国からの亡命者は黒人との関わり方に戸惑っていたようである[10]。

この亡命者と黒人との軋轢や、労働の対価としての賃金を支払うことを厭わない労働力調達の難しさは、英領ホンジュラスにおけるアメリカ南部連合国からの亡命者の定住を阻んだ。アメリカ南部連合国で黒人奴隷を無料の労働力として利用していた亡命者たちは黒人に労働対価として賃金を支払うことに納得できなかった。亡命者は労働力が必要でも黒人に対してだけは賃金を支払うことを拒んだ。そして黒人も人種主義的思考を持つアメリカ南部連合国からの亡命者のために働くことを拒んだ。加えて、英領ホンジュラス亡命後数年のうちにアメリカ南部連合国の華々しいプランテーション経済社会の再現は不可能であることが明確になった。それはアメリカ南部から持ち込んだ綿花の種類が降雨量の多い英領ホンジュラスの気候と土壌に合わず、実りが少なかったり、実っても腐ったりして利益を上げられなかったからだ。したがって労働力も英領ホンジュラスの気候に合った綿花も見つけることができず、綿花プランテーションが成功することはなかった。

そのような環境下でもアメリカ南部連合国から英領ホンジュラスへの亡命者を歓迎し、様々な定住政策を打ち出したのは英領ホンジュラスのオースティン副総督である。オースティン副総督はルイジアナ州ニューオーリンズからの定期大型汽船や、英領ホンジュラスのベリーズ・リバーの上流と下流を結ぶ定期船も就航させ、英領ホンジュラス植民地政府として亡命者を歓迎する姿勢をアピールした。特にアメリカ南部連合国からの早期亡命者がベリーズ・リバー上流にすでに設立していたニュー・リッチモンド開拓地へ新規亡命者が容易にアクセスできることは重要だった。さらに英領ホンジュラス植民地政府は、アメリカ南部連合

国からの亡命希望者に対して植民地政府所有の小舟や英王室測量技師を無料で提供した。そうすることで土地の購入を希望する亡命者が主要水路でアクセスできる物件を視察しやすい環境を作った。

このような施策を打ち出したことで、オースティン副総督とアメリカ南部連合軍からの亡命者たちとの関係は親密かつ強固なものになり、副総督邸では亡命者を歓待する定期的な社交パーティーや夕食会が開催された。そのような会合の散会時には必ず南部連合軍の軍歌の一つである「ボニー・ブルー・フラッグ」やメリーランド州歌「メリーランド、我がメリーランド」が合唱されたと記録されている[11][12]。この幾分過度に気前が良くアメリカ南部連合軍寄りの姿勢が目立ったオースティン副総督は 1867 年にイギリス本国へ召還されてしまった。

2.5. 1868 年～1870 年

オースティン副総督の代りに就任したのが亡命者に対して特別な定住促進活動はおろか友好的な態度を示さないロングドン新副総督であった。オースティン前副総督が提供していたような定住のための全面協力がなく、新天地でゼロから生活を築いていくのは困難を極めたようである。実際に、南北戦争で大方の財産を失い英領ホンジュラスに亡命してプランテーション経営で人生を立て直そうとした亡命者が、悪天候や害虫被害で綿花栽培に失敗し、期待していた収入を手にすることができなくなると完全に無一文になる者も少なくなかった。その結果、英領ホンジュラスで物乞いをしながら路上生活をするアメリカ南部連合軍からの亡命者が急増したのはこの時期である[13]。そのため英領ホンジュラスに駐在するアメリカ合衆国領事は、アメリカ行き的大型汽船を手配し本国国民の帰国希望者を無料で乗船させ救済せざるを得なかった。

この時期になってもアメリカ南部連合軍からの亡命者は黒人に対する不法で無礼で暴力的な態度を改めることができなかった。英領ホンジュラスは 1833 年の奴隷制廃止以降、公式に人種の平等を掲げていた。法律的には白人と黒人が同等の立場で、黒人も土地所有が可能で、理論的には白人よりも経済的に豊かな黒人がいても不思議ではない社会が構築されていた。しかし奴隷制を維持するために南北戦争を戦った亡命者に染みついた人種

主義的価値観や人種差別的習慣はそう簡単には変わらなかった。亡命者は黒人に対する暴力や人種差別などの問題行為を頻繁に起こした[14]。例えば亡命者は、黒人や先住民に対する暴力行為だけでなく、少しでも混血の可能性のある人物との交流を避け、黒人と親しい関係性を築いている白人を不快で卑しい存在であるとして交流する価値はないと排他的な態度を取っていた。さらに自分たち白人はアングロサクソンの血が流れているおかげで勤勉で知能が高いと公然と豪語する者も存在したことが記録されている[15]。

アメリカ南部連合軍からの亡命者は今までの人生で経験したことのない、自分と同等の立場の黒人との交流に驚くことばかりであった。ラブ元ミシシッピ州下院議員はその驚きを比較的好意的に受け止めていた数少ない人物である。ミシシッピ州の新聞に投稿した英領ホンジュラスでの経験として、税関や警察といった公職に黒人が就いていること、初めて参加した日曜礼拝で出会った住民のほとんどが石炭のように黒い黒人だったこと、彼らは黒人にも関わらず上品で身なりが良く優雅な振舞いをする紳士淑女だったこと、初めて訪れた教会で誰も知り合いがいない中、除け者にされるわけでもなく温かな気遣いを受け、席まで案内してもらえたこと、聖歌隊が素晴らしかったことが感銘を受けた点として列挙されていた[16]。

白人と黒人が法的に同等であること以外にアメリカ南部連合軍からの亡命者が驚いたのは英領ホンジュラスのイギリス人植民者から「ヤンキー」と呼ばれることであった。亡命者にとって「ヤンキー」はアメリカ南部連合軍を不当・不法に侵略し「北部侵略の戦争」に加担したアメリカ北部出身者を意味する言葉である。亡命者にとって「北部侵略の戦争」、つまり南北戦争を引き起こし、自分たちが無一文もしくはそれに近い状態で英領ホンジュラスに亡命しなければならなくなった原因を作ったアメリカ北部出身者と同等に扱われるのは屈辱以外の何ものでもない。亡命者はアメリカ北部と南部連合軍を区別しない英領ホンジュラスのイギリス人植民者に対して常に激しい怒りを抱いていた。現に亡命者はアメリカ北部やアメリカ合衆国政府に関係する事柄に対しても憎悪の念を抱いていることを隠そうとしなかった。このような「本国」からの亡命者について、英領ホンジュラスに駐在するアメリカ合衆国領事は、領事館に

合衆国国旗を掲揚したところ異常なほどの敵意を示されたと国務省へ報告している[17].

亡命者が抱く人種主義的価値観の影響を強く受けていたであろうと推測される亡命者の子どもたちは、学齢期になるとアメリカ南部の学校に送られた。その理由は黒人と机を並べることにに対する抵抗と黒人と親密になった結果としての混血に対する恐怖であった。この時代に英領植民地の白人子女が教育のためにイギリスではなくアメリカ南部に単身送られる事例は他のカリブ海諸国やラテンアメリカには通常見られない。そして現在でもベリーズ社会上層部の子女がアメリカ南部で高等教育を受ける事例が比較的多いこと、そして現在のベリーズとアメリカ南部の間にまず近隣諸国では見られない強い繋がりがあることから、アメリカ南部連合軍からの亡命者の影響は現在も少なからず存在するのではないかと推察せざるを得ない。

他方、英領ホンジュラスという小さなコミュニティで生き抜くには、人口規模がことさら小さい白人世界に留まるわけにはいかなかった。現在もベリーズに居住する亡命者の末裔たちは、文化的・人種的分離にこだわらずに生活するようになり、ありとあらゆる人種と混血している者がほとんどである。そのため身体的特徴に「白人らしさ」が目立つ者は多くない。そして彼らにアメリカ南部連合軍の生き残りとしての結末はない[18].

3. 定住の試み

3.1. トレド開拓地

アメリカ南部連合軍からの亡命者が入植して最も成功した開拓地は英領ホンジュラス南部 punta・ゴルダの近く、リオ・グランデ川とマホ・リバーに挟まれた地域に位置するトレド開拓地である。最盛期には 66 世帯が定住していた[19]. 現在も亡命者の末裔が確認できるほか、トレドで命を落とした亡命者とその歴代家族の墓も存在する(写真1).

開拓初期はルイジアナとミシシッピを中心に、アーカンサスやテキサスからも約 300 名の亡命者が定住を試みた[20]. しかしプランテーション開拓に必要な労働力が不足していた上に、コレラや黄熱、マラリアに罹患し命を落とす者が多かった。アメリカ南部で耕作経験のある綿花が英領ホンジュラスの気候と土壌に適さないとわかると、定住を諦めアメリカに帰って行く者が少なくなかった。一方で早々に綿花を諦めた Foster, Pearce, Mason,

Moore, Copeland, Perrett などの家族は、サトウキビ・プランテーション経営を軌道に乗せることができた。格安な甜菜糖流入に伴うキビ砂糖価格の暴落後も、彼らはバナナや豚肉、養蜂など近隣地域の需要に合わせた農業を展開し、経済的に安定した生活を送れるようになった。彼らのファミリーネームは現在もトレド住民に残る。

トレド開拓地が成功した理由の一つは、メソディストの教義を献身的に守る勤勉な亡命者たちの精神的な結束である。英領ホンジュラスで初めてメソディストが伝えられたトレドは、ミシシッピ州出身のメソディスト教会 Pearce 牧師がアメリカ南部連合軍からメソディスト信奉者の誘致に成功した開拓地である。1870 年以降のトレド開拓地の住民はカトリック信徒一名の例外を除き、すべてメソディストだった[21]. この信仰に基づく住民のコミュニティとしての団結は非常に強固で、ユダヤや英国国教会、カトリックなど他の宗教宗派の信仰者に対しては排他的な側面もあり、結果的にメソディスト以外のトレド入植を阻むほどであった。例えばトレドにバプティスト教義を広めようとしたテキサス州出身のモレル牧師と南部連合軍 6 州出身のバプティスト信奉者約 40 名はメソディスト住民から猛烈な反目に合い撤退せざるを得なかった。



写真1 “Confederate Cemetery”トレド県フォレスト・ホームにて 2023 年 2 月 伊藤みちる撮影

またプランテーション開拓に必要な労働力不足を解消できたこともトレド開拓地の成功理由である。トレド開拓地に隣接する punta・ゴルダの住民は主に黒人であり、黒人に賃金を払うことに納得できなかった亡命者たちは黒人を労働力として

雇えなかった。そして国境を接するグアテマラの先住民も雇用してはみたが、長時間労働をしないなど労働力として理想的な働き方をしなかった。そのため1872年に約200名のインド人年季奉公人を英領ジャマイカのサトウキビ・プランテーションから導入した。そうしてトレド開拓地でもサトウキビ・プランテーションを展開できるようになった。現代のトレド県にベリーズで一番多くインド系住民が住む理由は、当時のインド人年季奉公人がプランテーション閉鎖後も農業を続けていくことを選びトレドに定住したからである。

筆者は2023年2月にトレド県プンタ・ゴルダ近郊フォレスト・ホーム墓地の一角に位置する“Confederate Cemetery”を訪問した。19世紀後半の墓石だと推測される14の墓石が、うっそうと熱帯植物が生い茂る中に並び、そのうち判読可能な銘刻があったのは9つである(写真1)。墓石の銘刻から判断する限り、この墓地で埋葬されたのはMason家とPearce家だけであった。



写真2 “Confederate Cemetery”敷地内の“Julia Pearce Mason”の墓石 トレド県フォレスト・ホームにて
2023年2月 伊藤みちる撮影

写真2として掲載した墓石には、1854年9月18日生まれのJulia Pearce Masonが1885年に亡くなったことが標されている。筆者が入手できた限りの史資料には同名人物の記録は存在しない。幼少の頃に英領ホンジュラスに移住したPearce家の女

性がトレド開拓地で出会ったMason家の男性と結婚し、30歳か31歳の若さで亡くなったとも読めるが、現存する史資料に限りがあるため彼女の一生については推測の域を出ることはない。なおPerret家の墓地もフォレスト・ホーム墓地から5.8km離れた地域に存在するようであるが、今回のフィールドワークでは見つけることができず訪問が叶わなかった。

3.2. オレンジ・ウォーク開拓地

現在のベリーズで最も農業が盛んなオレンジ・ウォーク県にはベリーズ最大の製糖工場がある(写真3)。その製糖工場はかつてのオレンジ・ウォーク開拓地のタワー・ヒルに存在していた製糖工場の跡地に建設されたものである。ここで製糖された砂糖は2022年のベリーズ輸出額のうち約8,000万米ドルを計上し第一位の輸出品目となっている[22]。



写真3 タワー・ヒルの製糖工場にて
2023年2月 伊藤みちる撮影

オレンジ・ウォークを開拓し農業に適した土地へと変換したのがアメリカ南部連合国からの亡命者である。彼らはオレンジ・ウォークに駐屯する英植民地軍に加わり、ユカタン・カスタ戦争で徹底的な抗戦の後に先住民と停戦協定を結ぶことに貢献した。その結果オレンジ・ウォーク開拓地に平和と政治的な安定がもたらされ、落ち着いた環境で農業が発展していくことになった。まさに英領ホンジュラス植民地政府が抱いていたアメリカ南部連合国退役軍人に対する期待そのものに応えたのである。その戦巧者のうち代表的な人物は、

オレンジ・ウォークのニュー・リバー沿いに定住したルイジアナ州アルジェリーズ出身のジョン・プライスである。

アメリカ南北戦争では砲兵隊として活躍したジョン・プライスは英領ホンジュラスに亡命後、オレンジ・ウォーク郊外のタワー・ヒルに広大な土地を購入した。故郷ルイジアナでサトウキビ・プランテーションを経営していたジョン・プライスは後にルイジアナ・ファームと呼ばれるようになったその土地でもサトウキビ・プランテーションを設立した。ジョン・プライスのプランテーション経営の腕前は相当なもので、耕作を開始してから2年で1エーカー当たり2トン以上の砂糖を生産するほど成功した[23]。



写真4 計量台に乗るサトウキビを積んだトラック
タワー・ヒルの製糖工場にて
2023年2月 伊藤みちる撮影

ジョン・プライスのルイジアナ・ファームの一角にあった製糖工場は、現在まったく同じ場所に近代的な製糖工場として姿を変え、前述のようにベリーズの砂糖産業を支えている(写真4)。この当時からオレンジ・ウォークは「砂糖の街(Sugar City)」と呼ばれ、砂糖産業を基盤とする経済に支えられている。また筆者が2023年2月にオレンジ・ウォークを訪問した際には、ジョン・プライスの出身地であるルイジアナ州にちなんだ地名が各所に残っていた。街の中心にあるルイジアナ・フットボール・フィールドやルイジアナ自然公園などは市民の憩いの場となっている。

3.3. コロザル開拓地

前述のオレンジ・ウォークより約50km北部に

位置するコロザル開拓地は居住地として長い歴史を築けなかった。コロザル開拓地の中心となったのは、ピエール・ボーリガード・アメリカ南部連合軍陸軍将校の弟、アーマンド・ボーリガード指揮官である。1868年にアーマンド・ボーリガードは640エーカーのサン・ラモン・エステートを購入した。そのうち570エーカーの広大な牧草地に牛と馬、ラバを飼育し、70エーカーにサトウキビを植え、敷地内の製糖工場で砂糖を生産していた[24]。さらに製糖工場で排出される砂糖副産物を活用しラム酒の製造も行ってた。禁酒の戒律を持つトレド開拓地に入植したメソディスト亡命者とは異なり、コロザル開拓地に入植したカトリックのアーマンド・ボーリガードにはアルコール消費・製造の制限はない。そのためコロザルで蒸留されたラム酒は現地で消費されたほか国外に輸出された[25]。

コロザル開拓地は順調に開発が進んでいたがメキシコとの国境に近くユカタン・カスタ戦争の最前線であった。そのため常に先住民から攻撃される危険性があった。入植時には英植民地軍がコロザル近辺に駐屯し先住民の攻撃を牽制していたが、1869年に英植民地軍は翌年に撤退することを決めた。その知らせを受けた住民のほとんどは1869年9月までにルイジアナに引き上げ、二度とコロザルには戻って来なかった。また一度はコロザルに残ると決めた者たちも、先住民にさらなる攻撃を受ける前に降参して、家や土地、すべての持ち物を差し出し、コロザルを後にしてトレド開拓地に向かった。

3.4. ニュー・リッチモンド開拓地

首都ベルモパンに近いレーバリング・クリーク(Labouring Creek)とカット・アンド・スロウ・アウェイ・クリーク(Cut-and-Throw-Away Creek)が交わる地域にも開拓地が設置された。アメリカ南北戦争の南部連合軍の拠点であったバージニア州リッチモンドにあやかって命名されたニュー・リッチモンドは、近くを流れる川の名前から推測されるように、マホガニーを切り倒し(Cut)、下流に運搬するため川に投げ入れる(Throw Away)といった労働(Labour)が活発であった地域に位置する。

ニュー・リッチモンド開拓地は、1867年にメソディスト教会のデュバル牧師がバージニア州リッチモンドの繁栄を再現しようと、アメリカ南部連合軍幹部とその家族約300名を率いて亡命し定住

を試みた開拓地である[26]. 現在は開拓された痕跡がある広い土地が広がるだけである。

ニュー・リッチモンド開拓地定住に成功したといえるのはサタデー・クリーク沿いの約 30 平方キロメートルの土地を購入したコリン・マクレー南部連合軍財務官である。弟にウィリアム・マクレー南部連合軍陸軍准将, 兄にジョン・マクレー元ミシシッピ州知事を持つコリン・マクレーは, 広大な敷地に邸宅を建て, 牧畜やマホガニー輸出などを行っていた。この事業を支援していたのがジュダ・ベンジャミン南部連合軍国務長官の弟, ジョセフ・ベンジャミンである。コリン・マクレーは亡命時, 南北戦争時の横領容疑でアメリカ合衆国政府から氏名手配されていた。そのためアメリカに帰国すると逮捕されてしまうことから, 亡命後はミシシッピに残した家族を訪問することもせず, 一度もアメリカには戻らなかった。コリン・マクレーの開拓地は現在もマクレー・エステートとして名が残る。

マクレー・エステートの発掘調査では, エンフィールドライフルが発見された[27]. これは日本の戊辰戦争でも重宝された武器であるが, 大英帝国によって製造され, アメリカ南北戦争では南部連合軍によって使用された最も一般的な武器の一つである。コリン・マクレーが南北戦争中, 南部連合軍の武器と弾薬の確保を担当していた[28]ことを考えると, コリン・マクレーが英領ホンジュラスでエンフィールドライフルを保持していたとしても不思議ではない。

また 1867 年から 1902 年の間に製造されたコネチカット州の UMC 社製散弾銃ケーシングも発見された[29]. マクレー・エステートの考古学資料とコリン・マクレーが記録していた検認書からは, コリン・マクレーが UMC の弾薬と武器を英領ホンジュラスにしながら入手できていたことが確認できる[30]. したがってコリン・マクレーはマホガニー輸出などの公式で合法的な経済活動の他に, 英領ホンジュラスでの需要に合わせて武器や弾薬をアメリカから輸入し, 英領ホンジュラスで必要とする人たちに武器・弾薬を供給する非公式で違法な経済活動に従事していたと考えられる。

当時英領ホンジュラスでアメリカ南部連合国から武器・弾薬を入手しなければならなかったのはユカタン・カスタ戦争で白人支配層と戦っていたマヤの人たちである。英領ホンジュラス植民地

政府は 1867 年にマヤの人たちとの武器貿易を禁止し, アメリカからの武器や弾薬の輸入も規制していた。しかし前述のデュバル牧師の回想録には, ベリーズシティに住む義理の弟を通じてアメリカから火薬や銃弾などを安定的に入手できていたと書かれている[31]. 実際にマクレー・エステートで発掘されたタイプと同じケーシングがホロトゥニッチやサンペドロ・シリスといったユカタン・カスタ戦争激戦区でも発掘されている[32]. これらのことからハリソン=バックらは, 英領ホンジュラスに亡命してきたアメリカ南部連合国出身者こそがユカタン・カスタ戦争特需で利益を得ながら戦争を激化させ長引かせていた張本人だと主張する[33]. つまりアメリカ南部連合国からの亡命者は, 英領ホンジュラス植民地政府に入植の手筈を整えてもらいながら, ユカタン・カスタ戦争で英植民地軍に対して軍事的支援をしてもらえるだろうという英領ホンジュラス植民地政府の期待を裏切り, 秘密裏にユカタン・カスタ戦争で英植民地軍と戦っているマヤの人たちに武器・弾薬を供給することで対英軍事抵抗力を強化して, 英植民地軍を不利な立場に置いていたのである。

アメリカ南部連合国からの亡命者が英領ホンジュラス植民地政府と英植民地軍を意図的に欺いたのかは不明である。しかし現存する史料と考古学的発掘物から明らかなのは, アメリカ南部連合国からの亡命者が南北戦争で用いた銃器・火薬と, 南北戦争中にアメリカ国内で生産した銃器・火薬を英領ホンジュラス植民地政府の対戦相手であるマヤの人たちに供給していたこと, その結果英領ホンジュラスと英植民地軍が不利な立場に追いやられていたことである。

4. おわりに

アメリカ南部連合国から英領ホンジュラスへの亡命者については, 特にブラジルへの亡命者と比較し広く脚光を浴びてこなかった。しかし現在のベリーズ各地の地名としてわずかに残る, アメリカ南部連合国からの亡命者の名前やアメリカ南部連合国の都市などの名前は, 確実にアメリカ南部連合国から定住を見据えた移住の試みがあったことを物語る。

英領ホンジュラス植民地政府は農業生産力向上や白人人口増加, そしてユカタン・カスタ戦争の軍事的支援を期待してアメリカ南北戦争中からア

メロカ南部連合国の人たを対象に入植誘致を行、亡命を促した。アメリカ南部連合国の人たは、南北戦争後のアメリカ合衆国では財産や社会的地位、生活スタイルの維持は難しいと悟り、南北戦争前のアメリカ南部特有のプランテーション経済社会を再現するために英領ホンジュラスに亡命した。しかし英領ホンジュラスでもアメリカ南部連合国独特の政治的・経済的・社会的再現は不可能であると悟った者の多くは、亡命後数年のうちにアメリカに撤退してしまつた。

しかし、アメリカ南部連合国からの亡命者による英領ホンジュラス各地で行われたプランテーション設立の試みは大規模農業を発展させる基盤を確実に築いた。21世紀現在、ベリーズの主な輸出品である砂糖が生産されているのは、特にミシシッピ州とルイジアナ州出身の亡命者が開拓を進めたプランテーション跡地である。アメリカ南部連合国再現の試みは短期間のうちに不成功のまま不可能であると見切りを付けられてしまつたが、開拓された農地はベリーズへと国名が変わっても農業が牽引する長期的な経済発展に貢献した。

2023年2月に筆者が行つたフィールドワークでは、ベリーズは自身の植民地史の一部としてアメリカ南部連合国からの亡命者の功績を認識していない印象を受けた。筆者が約3週間のフィールドワーク中にアメリカ南部連合国からの亡命者の軌跡を見ることができたのは、探した末に高速道路沿いに立てられた“Confederate Cemetery”と書かれた目立たない看板を発見できたからである。

現在ベリーズではエコツーリズムや先住民文化を軸とした観光が主流である。アメリカ南部連合国からの亡命者については、現存する遺跡も史資料も限られている。しかし新たな観光資源として、また多角的にベリーズを理解するために、今まで以上に近隣諸国との差異を打ち出しながら「アメリカ南部連合国からの亡命者」といった視点からベリーズを探究するのも興味深いであろう。

謝辞

ベリーズでのフィールドワークを可能にしてくださつた国本伊代中央大学名誉教授に深い感謝の意を表します。豪雨の中、墓石の銘刻を読みふける筆者を広い心で待ってくださった杉山立志東京農業大学准教授、ソリス麻子ベリーズ・コンシェルジュ代表取締役に感謝致します。

引用文献

- [1] 初谷讓次. 中米ベリーズにおけるクレオール社会の形成. 上谷浩他編. ラテンアメリカが語る近代. 世界思想社, 1998, p.85.
- [2] Murray, Roy. Family and People all Well...-An account of the Occurrences in the Business of Mahogany and Logwood Cutting in the Bay of Honduras in 1789. 2006, Cubola Publications, p.20.
- [3] Colonial Office (London). “British Honduras Population as of 1803, March 312. CO 123/15. Camille, A. et al. “Historical Geography of the Belizean Logwood Trade”. Yearbook (Conference of Latin Americanist Geographers), 1996, 22, p.77-85.
- [4] Donohoe, William Arlington. A History of British Honduras. Provincial Publishing Company Limited, 1946, p.44.
- [5] Simmons, Ronald C. Confederate Settlements in British Honduras. McFarland, North Carolina, 2001, p.58.
- [6] Bolland, Nigel O. The Formation of a Colonial Society: Belize, from Conquest to Crown Colony. Johns Hopkins University Press, 1977, p.76.
- [7] Simmons, 2001, p.48.
- [8] Ibid. p.15.
- [9] Ibid. p.27.
- [10] Holdridge, Desmond. End of the River. Harcourt, Brace and company, 1940, p.391.
- [11] AMIGO. “From British Honduras”, Montgomery Weekly Advertiser (Alabama), 18 June 1867, p.3.
- [12] “From Belize, Honduras”, Daily Picayune (New Orleans), 14 June 1867, p.1.
- [13] 駐ベリーズ・アメリカ領事館公電.A.C. Prindle to F.W. Seward, No. 15, 1868年1月10日, FM T-334 Roll 3.
- [14] “It Is With No Little Regret”, British Honduras Colonist and Belize Advertiser, 24, October 1868, p.2.
- [15] R.T. Johnson. “British Honduras”. British Honduras Colonist and Belize Advertiser, 29 August 1868, p.3.
- [16] W.A. Love. “Social Customs in British Honduras”, Hinds County Gazette (Mississippi), 9 August 1867, p.1.
- [17] 駐ベリーズ・アメリカ領事館公電.A.C. Prindle to Hamilton Fish, No.95, 1870年4月12日, FM T-334 Roll 4.
- [18] 国本伊代. ベリーズにおけるメノナイト信徒

集団ーキリスト教再洗礼派が熱帯低地に求めた新天地の建設と展望.中央大学論集, 2003, 24, p.55-71.

[19] キャトル・ランディング (Cattle Landing) 入植者からロングドン副総督への手紙. 1868年3月27日, Public Archives of Belize, 97R583-585.

[20] Thomson, Peter. Belize: A Concise History. Macmillan Caribbean, 2004, p.110.

[21] Simmons, 2001, p.79.

[22] Statistical Institute of Belize. "Monthly Exports and Imports 2022". <https://sib.org.bz/statistics/economic-statistics/merchandise-trade/#1677096781094-ed2b6577-9136> [accessed on June 3, 2023.]

[23] "That an Extensive Immigration", New Era, 18 March 1871, p.3.

[24] 駐ベリーズ・アメリカ領事館公電. A.C. Prindle to W.A. Seward, No. 125, 1870年1月4日, FM T-334 Roll 4.

[25] Rosenberger, Daniel Ginter. "An Examination Of The Perpetuation Of Southern United States Institutions in British Honduras By A Colony Of Ex-Confederates". Doctor's dissertation, New York University, 1958, p.147.

[26] Camille, Michael A. "Historical Geography of the U.S. Confederate Settlement at Toledo, Belize: 1868-1930". Belcast Journal of Belizean Affairs, 1986, 3 (1&2): p.36.

[27] De Gennaro, John. "An investigation of colonial artifacts at the Stallworth-McRae site near Saturday creek". E. Harrison-Buck. ed., Surveying the Crossroads in the Middle Belize Valley: A Report of the 2011 Belize River East Archaeology Project. University of New Hampshire, Durham, 2011, p. 127-142.

[28] Davis, Charles S. Colin McRae: Confederate Financial Agent. Confederate Publishing Company, 1961, p.13-33.

[29] Okun, Adam. "Reassessment of research questions". Adam Okun ed. Investigations of the Byrd-Riley homestead: Results from the NMDOT US 82 Data Recovery Project. Eddy Country, New Mexico, 2012, p.147-157.

[30] Kaeding, Adam. et al. "A British colonial presence in the middle reaches of the Belize River: operations 5 and 6". Harrison-Buch ed. Surveying the Crossroads in the Middle Belize Valley: A Report of the 2011 Belize River East Archaeology Project. University of New Hampshire, 2011, p.111-126.

[31] Duval, B.R. A Narrative of Life and Travels in Mexico and British Honduras.... Legare Street Press, 2022, p.54

[32] Ng, Olivia. View from the Periphery: A hermeneutic Approach to the Archaeology of Holotunich (1865-1930), British Honduras. Doctoral dissertation, University of Pennsylvania, 2007, p.64.

[33] Harrison-Buck, Eleanor. at al. "The Strange Bedfellows of Northern Belize: British colonialists, Confederate Dreamers, Creole Loggers and the Caste War Maya of the Late Nineteenth Century". International Journal of Historical Archaeology. 2019, 23, p.172-203.

付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費 (N2202) の助成を受けたものです。

(受付日 : 2023年6月24日, 受理日 : 2024年4月17日)

**伊藤 みちる (いとう みちる)**

現職：大妻女子大学国際センター 准教授

プロフィール：

英国ウォーリック大学大学院 社会学研究科・カリブ海地域研究所修士課程修了。英国レスター大学大学院 国際関係学研究科修士課程修了。西インド諸島大学モナ校（ジャマイカ）専任講師，在トリニダード・トバゴ日本国大使館 社会・経済担当専門調査員，在ガイアナ国連開発計画 UNV プログラム・オフィサーを経て，2015年6月より大妻女子大学に入職。

専門は，カリブ海地域における政治・経済，社会問題，社会経済開発。

現在は，カリブ海地域のヨーロッパ系市民の白人性について調査を行っている。

主な著書：

『カリブ海世界を知るための70章』（明石書店，2016年）（共著）

『ベリーズを知るための60章』（明石書店，2024年予定）（共著）

伊藤みちる「脱植民地化を目指すバルバドスの白人マイノリティ-白人認識のナラティブ：特権・反人種差別・白人としての責任-」人間生活文化研究. 2024, 34, p.26-52.

Ito, Michiru. “Yoichi Watanabe: A Steelpan Archivist”. Interviewing the Caribbean. 2021, 7(1), p.154-160.

Ito, Michiru. “Whiteness and the Great Houses as ‘symbols of slavery’”. International Journal of Human Culture Studies. 2021, 31, p.382-392.

伊藤みちる「カリブ海地域におけるイスラム社会の形成と現況」. 人間生活文化研究. 2019, 29, p.603-609.

Ito, Michiru. “Constructing and reproducing whiteness: An oral history of French Creoles in Trinidad”. International Journal of Human Culture Studies. 2016, 26, p.613-645.